

下毛野淳行從我門出死人語くしもつけの あつゆき わがかどより しにんを いだす こと>20 卷-44

◎まだ昼間は 30 度前後の温度計なれど、朝晩が涼しくなり、布団を被って寝る日が続き、夏バテが徐々に解消し、進んでこの文章をやっつける気が湧いてきた、と書いている。

この章を読んで、「おお これは今でも通じる感覚」とほっとした。今昔文章の最後のしめに、今昔氏の感想が載せられているが、「そらあ 今じゃ 違うよ 通用しないよ」という所が多い。そのてんこの文章は、「そら そうだ」と相槌の打ちたくなる結末であるように思う。

◎主人公は淳行という役人：舎人（皇族、貴族に仕えた下級役人というが、主人公は、たいそうな名前が付いているので、下っ端の小物ではなさそうな・・。）

◎今は昔、右近将監下毛野淳行という近衛舎人がおった。若いころから人々に信任を集めていた男である。外見をはじめ、乗馬の術は素晴らしかった。朱雀天皇の御代以来朝廷に仕え、村上天皇の御代は、その全盛期で、非のうちどころのない舎人であった。

やがて、しだいに年月も積もり老齢に達してから、法師になって西ノ京の家に住んでいたが、ある時、隣家の主人が急死したので、この淳行入道は悔やみを述べにその家の門前に行き、死んだ人の子に会って、父親が亡くなったことについて愁傷を述べた。

すると、その子が、「実は死んだ父を 家から送りだそうと 思うのですが この家の門はたいへん 悪い方角に当たっております となれば どのようにしたらよろしいでしょうか」といい、さらに、「たとえ方角が悪くとも この門から出さないわけにはいきません」と話した。

入道はそれを聞き、「それはとんでもないことですな あなたの方のためにぜったい忌むべきことです それでは わたしの家との境の垣根を壊させ わたしの家の方角から お出しするようになさい 父御はお心の正しい方で 長年わたくしのために なにかにつけて情けをかけてくださった それゆえ かようなときにその御恩をお返し申さねば どうして恩返しができもうそう」という。

◎これを聞いた故人の子ども達は、とんでもないこと、という。他人の家から死人を運び出すことは絶対あってはならないという。「やはり我が家の門から出さないといけない」という。

◎入道は、「我が家の門から出しなさい」と言って帰った。

◎入道が帰って、妻子たちに事の始終を話した。

◎妻子たちはこれを聞き、「とんでもない 聖人だってこんなことは言いませんよ 人を憐れみ 我が身を顧みない とはいえ 自分の家から隣の死人を出すなんてこと・・」と猛反対である。

◎入道は妻子に、「お前たち 身勝手なことを言うものではない わしに任せておけ 馬鹿な親の意見でも それに従いなさい」

◎物忌みするものは短命で子孫が絶える。物忌みをしないものは長生きで子孫が栄える。恩を感謝し、我が身を顧みず恩返しをするものこそ本当の人間というのだ。

◎入道の云うように、隣の死者を、入道家の門から運び出した。

◎今昔氏：このことが世間に伝わり、世間は入道のことを讃め尊んだ。90 歳まで長生きをし子孫も栄えた。

◎物忌み：神事・祭祀において行動を慎み身を清める。穢れに触れた者、災厄や怪異現象の遭遇したもの、陰陽師の占いにより物忌み日が決められた人が、他人との接触や外出を避け自宅に籠る。

◎風水は陰陽道の要素のひとつ。陰陽道は、家相、風水、易經、天文、歴道、祈祷、密教秘術などの学問体系。

◎陰陽道師が風水にのっとって、「この日時 この方角は 慎むべき」と言ったんだね。この場合、禁を破ってその方角から出すか、非常識に他人の家から出すか、古代のこととはわからないね。

◎今年の5月、九州で知り合いになった方、73歳の方が中米のホンジュラスで暮らしている。その方のメールに“ハチクイモドキ”という南米大陸にいる鳥の話があった。「土の中 1メートルぐらいの深さから 出入りしている 美しい鳥」青色の中に黄色、緑色があり、しっぽが長くお洒落である。「この美しさは 赤道直下の熱帯地方の鳥だ」メールの先を読むと、土の中、1メートルぐらいの深い穴を掘り、そこを巣にしているそうだ。その鳥の話はさておき、土の中1メートルと聞き、自然薯を思い出した。

◎31歳の時ヒゲさんが、「展覧会をするぞ 見に来てくれ」と連絡をしてきた。彼とは二十歳前からの付き合い着かず離れずいまだに連絡がある。これを書きながら、なんとヒゲから電話、「ええ 久しぶり」と叫びながら不明な部分を修正した。会った当時から鍾馗さんのようなひげを生やしていた、瘦せて小柄な男だが運動神経がいいのか、ちょこまか動きがいい。新宿の美術研究所で初めて会い、ちょこちょこ話すうちに、下宿にも通い合い酒も飲むようになった。彼は彫刻を造りたいという人だった、今は家を造っているとか。

◎東京の郊外の所沢で野外展示をするという知らせ。「そらあ 行かないかん」新幹線に乗って駆け付けた。彼の作品は5メートルぐらいの裸婦像、粘土で作りそれを石膏で造ってある。これは石膏ゆえ野外で自然消滅したようだ。そんなでっかいものを東京郊外の里山で展示するという。東京在住の吉谷君を誘って現場に行った。多分その日はそのどこかでごろ寝をしたと思うがそこらあたりの記憶はない。

ヤマイモの話の前に、彼の展覧会をもう一度見ている。新しく同じようなものを5体造り展示したが、樹脂製なのでのちの火事で焼失したらしい。それを彼の故郷、四国の四万十川で展示したのがオレ50歳ぐらい。その時も見に行った。帰郷するというSさんに乗せてもらって会場に行った。

◎ヤマイモの話の時はオレも若く元気いっぱいの世間知らずだった。その日は何人かが来ていてそこでパーティをしようという計画だった。パーティが始まる昼過ぎに、「おい みんな その山で ヤマイモ 掘りに行くぞ」とヒゲさんが号令する。何のことかわからずスコップやら手袋やらをもって少し斜面の中に入って行った。彼がそこらあたりの蔓や葉を触って、「岡村 このを 掘れ 大きく掘れ」と地面に線を引く。直径1メートルぐらいの円を描いて、「外側から 掘れ」という。土など掘ったことの無いオレ、スコップを使って掘つていった。「まだまだ もっと深く」なんと五右衛門風呂がすっぽり入るぐらいの穴を掘らされた。「ここは 慎重に 無理したら ヤマイモが折れる ゆっくり」中に獲物のいる気配、オレもせっかくここまで掘ったのだからそれからは腫れものでも触るようにゆっくり手で搔き分けていった。出てきたのはくねくね牛蒡のような細い獲物、ほんまモノの自然薯が姿を現した。あんな小さい獲物を得るのに五右衛門風呂の穴は大袈裟だと思うが、後々人に聞くとそれが常識らしい。山もそんなでっかい穴を掘られるとおおいに迷惑だったと思うが、初めての事、知らん土地の事、ま、いいかである。

ヤマイモを3本ほど持ち帰り、おろして食べたが、労力のわりにはと思った覚えがある。「これはな 子どものころ 旅館に持て行けば けっこうな小遣い錢になった」と彼の話だった。50円ぐらいくれたそうだ。

◎ヤマイモ：古来から日本では芋と言えばこのヤマイモ：自然薯のことを言うらしい。中世になって中国からサトイモなどがやって来て、イモからヤマイモに格下げされたらしい。ヤマイモ、ヤマノイモ、自然薯は呼び名が違えども同じものらしい。

◎ヒゲさんはまだ元気だが、吉谷はもう亡くなつて10年ぐらいになるのかな。1年前、「おれや わかるか」とサンフランシスコ在住の仲野さんから電話があった。「え もう 死んだ おもってたぞ」しばらく話したが、身体も頭も相当弱っているようで、会話が続かなかつた。

075 三嶺山 071025

◎久しぶりの三嶺山、と調べると2年前の冬に行っている。この時は5人で雪の中を登った、途中でアイゼンを着ける山行だったが、押すな押すなの人出でもあった。今日もいつもの御杖村の青少年旅行村の手前で駐車した。昨日は、アスピ山の会の主催“青山コテージを借りBBQをしましょう”と言う会がありそれに参加した。去年初めて参加したのだが、今年は午前中に仕事があり今回はパスかと思っていたが、当日はBBQだけで、翌日に三嶺山に登るという計画を聞き、「午後からの参加でもいいか」という問い合わせに、「どうぞ」という快諾を得て行くことにした。

◎仕事というのは、公民館の絵画教室的なもの、63歳の萩さんという女性が高齢で絵画講座を持っていたが、脳梗塞で倒れた。寿永小学校のコミセンから土曜日を、赤大路小学校のコミセンから日曜日をとピンチヒッターを頼まれ、夏から講座が月4コマも増え多少小遣いがもらえる有難たさはあるが時間がとられオタオタしている。倒れた本人はそれどころではなく、「身体が動かん 生徒が待っている なかなか元に戻らない」それこそオタオタを通り越しての心境を察する。病気で倒れ、何もかもの予定がすっ飛んで、指をくわえて天井を見るしかないのはさぞ辛かろう。聞くところでは思考がしっかり踏みとどまっているらしいのは幸いだけれどこれまた辛い。いつになったら復帰するのか、オレがピンチヒッターから解放されるのか見当がつかない。

◎青山コテージの日が近づくとともに天気予報が雨に傾いていく。「こらあ 雨のBBQ 山も中止」と覚悟をした。朝9時半に赤大路小学校に向かって出発、2時間みなさんの絵を見せてもらった。萩さんは真面目な方で、初級、中級と区別をつけ、基礎の基礎が終わり次は水彩画という様子で教えておられる。「まあいいじゃないですか 絵を楽しみましょう」なんていいかげんに見させてもらっている。終わり車の中で弁当を食べ、青山のキャンプ場を車のナビに入れた。ここから高速を使っても、地道で163号線を使い三宅さんちの南山城村を通過しても時間がほとんど変わらない。「え～と・・」首をかしげながら去年も来た小屋に着いた。

「明日は晴れますよ 登りますよ」「おお 諦めてたが そりやあ 最高 あまり飲まないように」てなことでサンマをいただきビールをいただき、いろいろな牛肉の部位が出てきた。この山の会、「もう 山は登らない」というスタンスの会、月2回でも登りたいと思っているオレとしてはいささか頼りない会である。

◎BBQは11人の参加でおおいに飲み歌い、翌日の山は4人だけが行くという。御杖村の青少年旅行村に着いた時お一人が、「昨日飲み過ぎて だめ 車の中で 寝とく」そんなわけで3人で出発した。小林さんは10歳以上も下の男、まだまだ山は登っている瘦身の元気タイプ、松川さんは3.4年下なれどオレより強い登り方、登山口も道もおまかせで着いていった。30回ぐらい来ているかな、雪の季節の霧氷が有名な山で半分ぐらい霧氷を見に上がった覚えがある。登山口も御杖の方から三重県側からと4.5本ある。

◎今日の登山は特急である。小林さんがいたく早い、どんどん登っては、「早く来い 日が暮れる」と待ってくれるが、オレはどん尻では～は～である。駐車場からてっぺんまでの往復2時間50分、しかも途中で弁当を食っている。オレも60歳の頃はこれぐらい早かったかもと思いながら、ひ～ひ～は～は～の登山でした。

◎昨日は雨が強く降ったので山は濡れていた。雪が融ける時は道が泥んこ、靴もズボンも泥んこ、なんてことがあったが、今日はしっとり濡れているだけで滑ることもなく難なく歩けた。午前中は陽が照りだし樹々の中モヤリと空中が融けたようにぼんやりしていたが昼過ぎからは晴れの日の状態になっていった。今日は八丁平の方に足を延ばさなかったので樹々の中を歩くばかりで景色は見えない。来る途中に美杉という地名があったが、この山も下から上方まで杉の植林帯が続いていた。今の季節、赤いキノコ、白いキノコを見つけた。トリカブトもきれいに咲いていた。

◎トリカブト：植物全体に強い毒があり素手で触るのはやめましょう。アコニチンは皮膚からも吸収される。

◎今回も熊の話がさかんに出た。「会えば ただじゃ すまんもんね」今回もいつもの鈴と笛をぶら下げ歩いた。ただネット氏が言うには、日本で一番危険な人殺しの生物は“スズメバチ”だそうだ。

産女行南山科值鬼逃語 27-15 さんする おむな みなみやましなに ゆき おにあひて にぐる こと

◎宮仕えの女：彼女は今でいう女中といえども、屋敷に仕える高級お女中、お付きの女童までいる身分のようだ。

そんな女がいつの間にか身籠るという話。いつの間に、相手は誰だ、今昔氏はこういう問い合わせには無頓着でおられる。今ならまわりの同輩が心配するやら笑うやらのてんやわんや、スキャンダル話が飛び交う話だよね。

◎老女が鬼に変身する、その反対もあり。老女と鬼の結びつきの話は当時一般化していたそうだ。この話の鬼は人を食料として喰わんとする。鬼の企みは、悪さをする、人を化かす、人を殺す、人を喰う、人を食料として食べる、人を見ると、「美味そうな」という老女に化けた鬼の話。

◎女が歩いたのは山科。距離にして 10 キロぐらい、御所のあたりから東南東に進み、賀茂川を渡り粟田口（知恩院のあたりかな）を過ぎ山科の方に進んでいる。平安時代の山科は貴族の別荘地が多く寺社も多い。

◎今は昔、ある屋敷に仕える女がいた。父母も親戚もなく、知り合いとてまったくないので、これと言って行く所もなく、ただ自分の部屋に籠りっきりで、もし病気にでもなったらどうしようと、心細く思っていた。が、いつしか、これといった夫もいないのに懷妊した。

そこで、いよいよ我が身の宿世（す癖：仏教用語：前世のこと：現世が前世の行いによって定まる）が思いやられてひたすら嘆いていたが、それにしてもまずどこで産んだらよいかと思うにつけ、どうしてよいかわからず、相談するものもない。主人に話すのも恥ずかしくて言い出せなかつた。

だが、この女は根が賢い女で、こう思いついた、「もし産気づいたら ただ一人使っている女童を連れて どことでも知れぬ深い山に行き どんな木の下でもいいから そこで産もう そこなら もし死んでも人に知られずにすむだろう またもし 無事だったらそしらぬ様子で帰ってこよう」こう思ったものの、次第に臨月が近づくにつれ、いいようもなく悲しくなったが、素知らぬ風を装って密かに手はずを整え、食物など少し用意してこの女童にも事情を言い含め、日を過ごしているうちに、いつしか臨月になつた。

やがて、ある明け方、出産の気配がしてきたので、世の明けぬうちと思い、女童に用意の品を残らず持たせ、急いで家を出た。東の方が山に近いだろうと思い、京を出て東に向かっているうち、賀茂川のあたりで夜が明けた。さてどこへ行こうと心細くはあったが、気をとり直し、休み休みしながら粟田山のほうに歩き続け山深く入つた。

◎北山科にやって来た女は、崖添いに山荘のような無人に見える屋敷を見つけた。女は、「ここがいい ここで産み下ろして 子は置いて 帰ろう」垣根を超えて中に入った。中に入り一息入れていると、足音が、「どなた様」白髪の老婆が現れた。女はそのまま泣く泣く話すと、「お氣の毒 ここで産みなされ」女はなんとうれしいことだろうと思い、老婆も、「うれしいことじゃ」と言ってくれた。まもなく無事子を産み、産湯を使わせてくれ、捨てようとした男の子もかわいい、乳を飲ませ寝かしつけた。

2.3 日経って、昼寝をしていると、老婆が赤子を見て、「なんと美味そうな ただひと口じゃ」夢うつつに聞き、これは鬼だ、食われてしまう、逃げ出そうという気になった。

◎そこで、ある時、老婆が昼寝をしてぐっすり寝込んでいる時を見計らって、そっと女童に子を背負わせ、自分は身軽になって、「仮様 お助けください」と念じて家を抜け出し、もと来た道をそのまま走りに走って逃げ、まもなく粟田口に出た。そこから賀茂河原の方に行き、とある小屋に入って、そこで着物を着直し、日が暮れてから主人の屋敷に帰つていった。賢い女であったから、こういうことができたのである。子は人に預けて養わせた。その後、この老婆の消息は分からなかった。

◎今昔氏：こういう古びた家には鬼が住んでいるので、一人で入ってはいけないぞ。

077 ヨット 141025

◎10月も中旬だというのに半袖シャツ一枚で過ごせるという暑さ、それでも電車の中は冷房が効いて涼しい。阪神西宮駅で降り改札口を出たが様子が違う、「あれえ おかしいな 西宮やねえ」と首を傾げ神戸よりに歩いた。どうもこの駅は構内ビルが長く続き、バスターミナルが端に在る、今回のように後ろから出ると前の方に相当歩かないといけないようだ。ICレコーダーの録音によると、「いっちゃん ケツから降りてしまった あちや～ 500メータも 前の方に歩かされた」しかも今日はヨットに乗るというのに茨木駅まで歩いた時も今も小雨が降っている。アウトドアの雨は嫌だよねえ。

◎いよいよ出港した。ブルブルブル、小型エンジンが船を進めていく。ヨットハーバーには幾多のヨットが数珠つなぎに並んでいる。数珠つなぎという表現は間違っている、歯型の桟橋にそれぞれ並列に男百台と係留されている。そんな間をゆっくりすり抜けちょっと広いところでややスピードを上げ進む。「今日は無風 帆は無理 エンジンだけで 1時間ほど 回遊」コンクリートの突堤を抜けると瀬戸内海に出る。無風とはいえ船は揺れる、帆がなくてもそれなりに進んで行く。もう5回ぐらい乗せてもらったことがあるが、今日は10年ぶりぐらいなので懐かしい。大阪湾のえぐれが見える、万博会場の回廊が見える、大阪市のゴミ焼却場が見える、関空も見える、神戸空港も見える、飛行機が次々飛んで行く。海の上から見まわすと、いつものオカの上、山の上からの景色と違い地平線が見え空がデカイ、全部が空である。「夕方から晴れる 花火は決行」という通りに西の空から晴れだし、陽の沈む2時間ぐらい前の今、あれはなんという青色かな、オレも表現がしようのないうすら青に雲が、黄色が、赤が混ざり合っている。

◎前日は十三で15人ほど集まって中華料理屋で卓を囲んだ。仲間の小児科医の中野さんが同窓会館で講演をするという。オレは午前中に絵の講座があり、その講演会は欠席して30分前に予約の店に行ったが開店が30分後なので十三の街を一周した。たまたま足場の組んだビル、なんと壁画の製作中である。部分的にほとんどできあがっているところもある。十三の街は以前から京芸出身の方が壁画工房を造りすでに何十箇所かの壁画が存在する。一人ぶらぶらしている関係者らしい人がいたので、「バキバキ君ですか」「いえいえ」なのか違うのか、でも彼は壁画の説明をし始めた。「オレもえかきで 大昔 壁画 やったことがある」という話をした。そのぶらぶら氏は描く人ではないようで詳細は通じなかった。「ところで 何年もちますか」「5年です メンテナンスをしても 10年です」壁全体の壁画、耐用年数は低いだろうなと思っていたが、まさかの5年、これは短すぎるとびっくりである。

◎「ビールを 飲もうや」橋本船長のひと声で船底からの缶ビールが配られる。ぐびり、うまい、ブルブルブルエンジン音で進んで行く。でっかい船も見える、ヨットも見える、モーター艇も見える、漁船はいないね、六甲の山脈に白い雲がふわり、ボラが跳ね上がる、カモメが飛ぶ、カモメが浮いている、あれはミサゴかな、トビまでいるよ、全員、舌がなめらかになり笑い声が弾む。今日は船の上でまずビールを飲んで1時間ほどぐるり、その後桟橋に繋ぎ船のまわりで宴会である。昨日も十三、今日は西宮連日の酒宴だ。細い桟橋でコンロを使って肉や野菜を焼いた。それらを片付け船の上で飲み直そうと座れる場所を探して腰かけた。ワインがある、日本酒がある、いやあ酔うネとまた一杯。なぎの水の上それでもゆらゆら揺れる。オレね、何度も言っているが、火野葦平の自転車番組、アレの後姿を、自転車の後姿の映像を見るだけで気持ちが悪くなる、その場面がでたら横を見るようにしている。これをひとに言うと、「そんな あほうな」と一笑されるが、「お オレもだ 同じだ」と賛同する人にはあったことがない。それでも空を見ながら胚を重ねた。

◎ヨットハーバー主催の花火は10分ぐらいで軽く終わったが、その後万博会場に上がった花火はなかなかのモノであった。万博は翌日が閉幕だ。

- ◎朝8時過ぎに衣川宅を出発した。「8時に車で来てください 荷の僕の車に積み替え 出発しましょう」という約束で、茨木を7時半前に出発した。今日は終日なので多少は混むかなと思いつつわが家を出発して走り出ましたが、自転車でも15分で着くところ、中央環状線まで20分もかかっている、ひとつの信号を通過するのに4回もひつかかる。約束の時間より10分遅れて着き、オレの荷物を衣川車に積み込み出発した。今回は蒜山のキャンプ場で2泊して大山の南面の峠を登って森林浴をするのが目的である。
- ◎「僕はもう樹の無い山のてっぺんに登りたくない 森林の中がいい 森の空気がいい 緑色に囲まれたい」といつも聞く。オレは去年の11月に蒜山高原を歩いた、なかなか楽しい山だった。大山は三度ぐらい登ったが楽しく思わなかった、それは登山道の左右に柵があり人も多く、「羊を柵から出すな」と仕向けられているようで嫌だった。「さあ今回の森林浴は楽しみである」と胸膨らませていた。
- ◎勝央：しょうおう：サービスエリアで休憩した。あまり混んでいないSAということだったがラーメンは不味い。天気が良くない、今現在は晴れているが快晴ではない。テント泊のアウトドアでは雨マークは天敵である。若いころは、「少々の雨なんか」と笑っていたがジジイになって嫌である。山に行く時は、気象庁の“山の天気”と“高原と山の天気”二つのサイトを見るようにしている。今回三日間とも曖昧だ、ちらほら雨マークも書いてある、「こらああかんで天気が怪しい」とは思っていたが決行した。落合JCTから蒜山、大山方面に進むと雲ゆきが怪しくなってきた。中国自動車道は中国地方の南北の中ほどを走っている。分水嶺がどこかは知らないが、日本海側に進むにつれ雨模様の天気、長いトンネルを抜けるとワイパーを回すぐらいに降ってきた、蒜山ICを降りる頃にはザザブリである。「雨濡れた地面にテントを張るええええらいこっちや・・」気持ちがおおいに沈んできた。
- ◎去年の11月に蒜山を登った。「おお予約してくれたのは同じキャンプ場去年もここだった」と中に入り、「炊事場でテント張る」「あそこに備え付けの大きなテントがある」「中はどんな感じ」「おこれなら寝られる机も椅子もある立ってうろうろできるこれ借りよう」少し離れた休暇村の受付に行き、「テント場予約した・・」と話を進めたら、「あのテントはダメです用意ができてないのでお貸しえません」とかたくなに断られた。「そんなこと言わんとこの雨なので貸してくれ何度も粘ってようやく借りることができた。二人とそのテントでプラス3000円の4500円であった。
- ◎トンネルを超えて以来ザザブリの雨が続く、気温も下がり綿入りのジャンパーを着込んだ。夜になってもザザブリは続く、「こらあ明日山どころじゃないね朝起きてまだ降ってたら明日もう帰りましょうか」と言いながらコンロに火を点け野菜を煮込み宴が進んだ。ビール、ワイン、「美味しいねえ」と言いながら鍋もアルコールも進む。「僕は車で寝る」もう明日はあきらめかなと思いながらシラフに潜り込んだ。
- ◎朝7時前に起き上がって外へ出たがまだ小雨が降っている。「朝飯は8時味噌汁に昨日食べなかったうどんを入れて」と聞いていたので傘をさして1時間あたり散歩した。高原の牧場地帯というけれど前回も今回もジャージー牛の姿は見えない。ゴルフ場のような景色、草の草原は牛の放牧地だと思われるが牛の姿はない。放牧地以外の場所は下草が生い茂り入っていくなら、「藪漕ぎをしなくっちゃ」という風景。刈られた芝生に高木が生える、ゴルフ場のような景色の中にキャンプ場があり、休暇村のホテルがある。本来ならすぐそばに蒜山の山が聳えているのだが全く雲の中、南の方、瀬戸内海側が少し明るいだけである。
- ◎ミネラウォーターの奥大山に行きましょうと車を走らせた。大山の南側、日本海から見ると大山の裏側“奥大山”である。サイトを検索するとミネラルウォーターの宣伝ばかりで森のことが出てこない、なのでオレの感想を。標高1000Mのこのあたりブナが有名らしいが、ほかにもたくさん広葉樹がでっかく育っている。雨の降っている今日は特に湿度も高そうでどっしりしっとりのかい森である。大きな樹の間を抜ける遊歩道をあっちこっちと1時間ほど歩いた。
- ◎今回は新車の衣川車、全部運転してくれた。料理献立も野菜刻みも全部してくれた。ザザブリのテントの中の食事だけとはいえ、森が感じられた、それで我慢しよう。

- ◎「探し物はなんですか なかなか見つからないものですか・・ふふふふ」なんて歌があったが、えらい目にあった。今回失くしたのは自転車の鍵。ヒトの家の鍵、預かった画廊の鍵、山で忘れたストック、ふと思いつくだけでもすらすら出てくる。オレの性格は、「失くしたものを探したい なんとしても探したい 出てきた時の喜び」てなことで、探索中のカッカや、「あそこでもない あの時でもない」とツマラ無い話をくどくど。
- ◎蒜山に行った翌日、昼間に用事だったので河原に行く時間が夕方になってしまった。雨続きなので安威川土手の内側は水浸し、なので中央市場の方に行った。下水処理場の前に自転車を止めグラウンドまで2往復してまもなく自転車の所、ポケットの鍵を探した。「ない え ない 鍵をかけ忘れたかな」自転車のところに行くと鍵はちゃんとかかっている。「が~ん そんな馬鹿な」もう暗くなっている。「落とした 道路にあるはず」引き返しへッドライトを照らして走った、ゆっくり地面を見て進んだ。「鍵には鈴が付いてある わかるはずだ」体操をした場所まで来たが無い。目を凝らして地面を見てもと来た道を引き返した。ビニール袋、空き缶、ペットボトル、紙きれ、ごみはすぐに目につくが鍵が無い。
- ◎鍵のかかった自転車を引っ張って歩くのは大変な作業である。もう夜の7時をまわっている、このあたりで自転車を預かってくれるところはない、放置して帰れば盗難にあう確率は高い、「くそお 引っ張って帰るか」荷台の紐を肩にかけ自転車の後輪を浮かせて歩き始めた。100メートル 200メートル、歩きながらフーフーである。息が切れ倒れそうである。信号を渡り、次の信号を渡り、まだまだ三分の一も来ていない。拷問のような1時間であった、暗くさびしい歩道を、住宅街を、とろりとろり歩いた。
- ◎へとへとになって家に帰着いた、飯を喰い風呂に入り作戦を考えた。「予備の鍵があるはずだ あれを探せば 鍵は簡単に開く 自転車は動く 鍵を潰すと あとあとまた大変だ 明日は一日 用事がない日だ」そんなことを考えながら布団に入った。翌朝目覚め、朝飯を喰い雑用をこなしてたあと、アトリエの机の引き出し、棚の上などを引っ搔き回した。「大事にとってあるモノ でももう断捨離だ 引き出しには無いねえ」棚の上の紙やら鉛筆やらを触っている時、赤い紐が付いた鍵が見つかった。「おお これだ よかった」「さあ どうしよう」としばらく思案の末、「よし 探しに行こう 昨日の場所に 幸い今日は 晴れの天気 お陽さんが出ている」自転車に乗って昨日駐輪した場所まで行った。同じ道を歩き始めた、「無いね ないね」10分ほど歩いた時、「あった 鍵だあ やった」探し物落とし物を道の途中で見つけた時の喜び感動は格別である。「しようむない そんなこと」と笑われるかもしれないが心底嬉しかった。昨夜走り出してこのあたりで暗くなってきたのでポケットに入っていたヘッドランプを出して頭につけそのまま走った。その時に鍵を落としたようだ。「ひとつのポケットに 鍵だけ入れる 鍵だけ だ」これをずっと守っていたのに昨日は二つ入れてしまった、鍵を落としたのに気づかなかった、「くそお」である。
- ◎元に戻り自転車で家に帰った。前の自転車でしていたように、予備の鍵を自転車のパイプにテープで貼りつけた、これで紛失した時は予備の鍵で走れるもんね。前の自動車：アコードの時も天上のところにキーを貼り付けていた、車を処分する時のキーでエンジンを回してみたが快調に回転した。
- ◎今年の春、友人のNさんが入院するというので彼の家から茨木まで送迎した折、「家の鍵 かけ忘れたかも 鍵預けるから 家 見てきて」と頼まれ彼の家を確認に行きそのままスーパーで買い物をした。家に帰ってカバンを見ると彼の鍵が無い、慌てたねえ。結局スーパーのレジで落としていたので事なきを得たがまずはほっのほっであった。
- ◎5年ぐらい前、Hさんの信州別荘に行った折り、オレだけ蓼科山に登った。待ち合わせ時間が迫っていると下山していた。「あ ザックが無い えええ 先ほど一本取ったところで 忘れたか」疲れた身体で登り返すのはまことにしんどいが、フーフー言ってその場所に行くとあった、うれしい。
こんなことがこの何年かで何回もあった、「見つかった うれしい」である。

- ◎7:50 道路横の鉄階段から登り始めた。「ここから登ったら 近いよ」と教えられ地図を調べた。朝5時に家を出発、近畿自動車道から南阪奈、新堂から京奈和道に行くつもりだったが真っ暗で見落とし、169号線に進んでしまったが2時間半でぴったりの場所に着いた。途中でスマホを忘れたことに気づいた。山ではスマホの中の地図が非常に便利、今回の山も紙の地図は持ってきたが、「今 オレは 何処にいる」を地図で示してくれる。帰り道“大嶺奥駿道”から左折して車のところに降りる場所、「多分 これで あってる・・」とあやふやに進んだ。それともうひとつ車まで帰って、「下山した」の連絡がつけられる。
- ◎「おお でっかい 樹 行者檜と書いてある」二股に分かれているが元は同根かな。少し前から“桧と杉”的区別がわからなくなってきた。同様に“空海と最澄”が曖昧になり、“時間と速度”的計算が鈍くなってきたとボケを痛感。この山はコースタイムが往復4時間半なので、いつもの比良に比べ、「ちょい楽かな」と合流地点の乗越までえんやこら登っている。
- ◎乗越までの半分ぐらい、1250M地点で、「元林道かな」と思わせるような道、上で会った人に教えられたが、山の中にブルーの廃車トラック、Dデリカ2500が土と草に埋もれていた。
- ◎8:40 大嶺奥駿道のある乗越に到着、「おお この尾根道 素晴らしく きれい」行者還岳は60歳前後に澤山さん等と何回か登ったがルートは忘れた。11年前に衣川さんと大嶺奥駿道を7日間かけ歩いた時には、ここをさっさか急いで通り過ぎたので記憶にない。1週間前の蒜山もここも、紅葉にはまだ少し早いようで所々が赤く黄色く散らばるだけだ。極暑の今年、夏日が終わってまだ10日ぐらいしか経っていない。今日の服装はどうしようと思案した、化織のシャツ3枚を重ねているが肌寒い、防寒ジャンパーをもって上がるかと迷ったが、休憩時に羽織ると暖かい、持ってきてよかった。
- ◎この尾根道は気持ちがいい、山全体が夜露で湿っている、午前中の陽の光がピカリと照らす、地面は濡れている尾根の左右には大きな樹、枯れたもの倒れたもの苔が生え苔が生えている。「え 道が無い」なんと獸道のような風情になり細いトラバース、ひと抱かえもあるゴロゴロ石の道、大嶺奥駿道はなかなかに歩きにくいところがあるねえ。
- ◎9:30 行者避難小屋に着いた。「あれれ 扇が開かない そんなあ・・」一生懸命引いていた、押すとすっと開いた、「おはずかしい」トイレまであり中はなかなかにきれいである。
- ◎10:10 てっぺんに到着。1500Mなのに樹がいっぱいで展望がゼロ、これはつまらないと少し下の大嶺奥駿道で早い昼飯を食べることにした。気持ちがいい、きれい、最高である。ラーメンにポットの湯を入れおにぎりを出した。倒れた樹に10個ほど“お化けキノコ”なのか“猿の腰掛”なのか不思議な風景。遠くに山脈が連なっている。昔、中西さんが、「山なみの写真 ええとこないか」と聞かれ竜神スカイラインを紹介した。奈良の山々は1500Mクラスの山が連なって見える、山の国だ。
- ◎10:50 「今日はこれぐらいに しといてやっか」ということで帰り始めた。この山はいつもの定点にしている比良に比べ、いささか険しい。緊張する場面が多い。以前ならなんてこともなかった斜面や岩もジジイになってバランス感覚が悪くなり、体幹そのものが衰え、三点確保、四点確保で慎重に下った。階段はしご部分があったが、登りも下りも前向きに段を掴んでゆっくり下った。
- ◎斜面の横に一枚岩、そこに樹が3本生えている。岩の壁に横線が走りそこに土埃がそこに苔が、そしてそこに種が着床、1Mぐらいのヒヨロヒヨロ樹が育っている。「どこまで大きく育つかな 年が経ちそのヒヨロヒヨロがの根が岩を抱きかかえ、大木になるかも知れないねえ。「そりゃあ 100年先かな」
- ◎帰り道で、一部網で囲った場所でおっさん連が7.8人網をはずして調査をしていた。鹿の食害を防ぐための囲いと思っていたが、植生、土壤なんかも調べているのかな。TVでアメリカの森にオオカミを放った話。最初はいろんな悪影響が出たが10年経って、かつての動植物たちの活発な姿が見えてきたと報道していた。オレも、「日本で オオカミ 放つのもいいかも」と言ったらまわりの皆さんから大ブーイングをいただいた。
- ◎12:20 乗越出発、1時ちょうどに車に帰り着いた。濡れタオルで身体を拭き車で自宅に向かって出発した。